

## 老いる経験

——モンテニユとジャンケレヴィッチの眼差し——

和田 渡

### はじめに

これまで、哲学のみならず、心理学や文学、宗教、芸術などの分野で、人間の経験は多種多様な仕方でも語られてきた。ただちに筆者に思い浮かぶのは、ウィリアム・ジェームズの宗教的経験論、ジャン・ヴァールの形而上学的経験論、フッサールの現象学的経験論、レヴィナスの他者経験論、森有正の経験と思想論などである。これらの人物は、感覚、知覚、言語と意味、信仰、身体、世界といった経験の諸相に関する思索をそれぞれの観点から繰り広げてきた。彼らは、老いてもなお一貫して経験を語ることを止めなかったが、翻って老いるという経験そのものを主題化することは決して多くはなかった。その理由を推測するに、上述の哲学者たちにおいては、老いに伴う思索の深まりに依拠して、探究してきた経験の気づかなかった位相が次々と現われ、それらを追跡する思索が死ぬまで継続されたと考えられる。そうした思索の過程において、現に自己において進行中の老いるという経験がどのような種類の経験であり、その最中で何が起きているのか、その先に何が待つのかといった問いは、あまり問題にはならなかったに違いない。老いるということとは、誰もが新参者として出会わなければならない経験であるが、その個別的で私的な性格の強い経験を主題化することは、さして彼らの興味を引くものでなかったと言えるだろう。

しかし、老いるという経験の記述は、それ以外の経験の記述よりも軽んじたり、無視したりしてよいものだろうか。否である。年老いて初めて分かるのは、老いる過程が何かしら不気味で判然としない不思議な出来事の連続だということである。老いの意識の先鋭化と未来の限定性の確認、死の予感、日々姿を変えて出現する、以前にはなかった身体の異変や変調、もろくも崩れゆく存在への気づきなどが入り混じる過程は、かつて見知ったことのない奇異な経験として受け止められるのである。老いるという経験は、自分の身体の衰弱化に伴って、不可避的に身体としての存在が強く意識され始める過程である。観念過剰な青年期には後景に退いていた身体が前景に出てくるのである。身体の衰えに精神も影響されて変調をきたし始め、固有名詞が出てこない、単語が覚えられない、覚えてもすぐ忘れるといった症状も顕著になる。そうした徐々に変化していく経験の細部を入念に記述することは、とりわけ人間の理性的、能動的、自発的な側面に注視する人間存在論が見逃してしまいがちな経験の暗鬱な側面や滑稽な場面、みじめで悲しい状況などを浮き彫りにすることである。それはまた、意志的にはどうすることもできない自然の働きに身をゆだねながら、その成り行きを苦痛や悲哀の感情とともに見定めていくことでもある。その試みは、決して楽しいものではない。しかし、それは、老境に達した人に可能になる、ささやかで目立たないながらも、未知の経験領域に踏みこんでいく、一種の冒険と言ってもよい

だろう。看護や医療の分野では、医師や看護師、介護者などがそれぞれの観点から、老いて衰え、病み、苦しんで死んでいく患者とのかかわりを述べた患者論が多く書かれている。しかし、自らの老いの経験の諸相を直視しながら、老人にならなければ実感できないような経験の細部を一人称的な観点から描くものは多くはない。その具体的な経験を、時にユーモラスに、時にシニカルに描いてくれる報告は貴重である<sup>①</sup>。

そこで、以下では、自己の心身の衰退するさまをたじろぐことなく見詰め、さらに周辺の老人たちのさまざまな言動を観察しながら、老いるということがどういう事態なのかを入念に考察している二人の人物——モンテーニュとジャンケレヴィッチーの思索を手がかりにして、老いるという経験がどのような性質の経験なのかを考えてみたい。

## 1 モンテーニュの老人観

### — 衰退する生と生への愛・生の享受

モンテーニュは、「刻々と移ろう自己の存在」を多彩な仕方でも描写している『エッセー』の何箇所かで、自分の心身融合的な人間観や、精神的、身体的な老いと、それに関連して生じてくるさまざまな問題について率直に語っている。モンテーニュは身体と精神を分離し、前者を低級で卑しいと貶め、後者を称揚するという偏った見方をする連中を手厳しく批判し、自己とは心身がよき夫婦のように睦みあう存在以外のなにもでもない主張している。「私は、地に足をつけた生き方しかしておらず、われわれに身体の鍛錬を軽蔑させ、敵視させようとす非人間的な知恵を憎むものである」<sup>②</sup>。モンテーニュは、身体を鍛えることが、身体と結びついた精神によい影響をもたらすことも疑わなかった。心身の両面に配慮して生きること、それは、「自己の全体をまるごと味わいつくす」と

いう彼の強い願望に直結した。結果として、モンテーニュは、自己の身体と精神の影響しあう現象に等しく強い関心を示し、精神的、身体的な享受を十分なものにするように工夫を凝らした。それゆえに、モンテーニュは、日常生活における身体的なふるまいや、心身が相互に影響を受けて変容するさま、身体の自然的な生理現象の細部、四〇代に発症した結石の症状などを丹念に記述し続けたのである。

そこでまず、彼が自分の身体に対してどのような態度をとっていたかを見てみよう。モンテーニュの身体に対する態度は、結石で苦しむ病気の身体の自己診断を、医師の診断や療法と比較しながら語る時を除けば、概して、きわめておおらかで、明るく、身体が関わるといふ出来事も積極的に認めようとしている。彼はまた、自分の身体との一体化の経験や、身体の抱擁、身体への惜しみない愛を何度も強調している (cf. 639)。モンテーニュの身体讃歌のなかでは、身体の自然的な秩序に従って生ずる性的な快楽への率直な記述が特に目を引く。彼は、性行為について「歯の間に物の挟まったようなあいまいな言い方しかない」(85) 人々を皮肉りながら、身体的な快楽を罪悪視したり、隠そうとしたりすることの愚劣さを批判している。彼は、エロスの世界で繰り広げられる行為を讚美した。性行為は気高くも、喜ばしいものであり、それを隠そうとすることこそ野蛮ではないか、それがモンテーニュの見方であった (cf. 876) <sup>③</sup>。

彼はまた、身体の活動力の源泉となる食事の快楽を強調するが、他方で、飲食すれば必ず訪れる排尿や排便についても何のてらいもなく語る。性行為についての話題がしばしば日常の会話から締め出されるように、「下の話」も下品で、はしたないこととして避けられがちだ。しかし、食べたものが幸いにも尿や便として出てくるまでの生理的な過程は、身体的自然の恩寵による奇蹟とでも言うべきものであり、感謝こそすれ、不

潔、不浄などとネガティブに捉えるべきではない。糞尿は、生理的秩序の安寧な状態を示す、健やかで、喜ばしい結実の姿なのであり、便所は自然の精妙な働きを心して受けとめるべき神聖な場所なのである。褒め称えられるべきもの、ありがたく受けとめるべきもの、それは身体のですべての技であり、身体的な自然の技の成果を不浄視するのは論外なのである。モンテーニュにとって、身体は乾杯の対象である。

とはいえ、年を重ねるごとに、われわれの身体は、往年の輝きやしなやかさを失って、徐々に硬くなり、ひからびていく。モンテーニュは、第三巻の第二章「後悔について」のなかで、過去を振り返りつつ、現在の心境をこう語る。「私は自分の身体という草が生え、花が咲き、実が実るのを見てきたし、今や、身体が枯れるのを目にしている」(816)。彼は、身体の老いが精神にもたらす影響も強く意識している。この章の締めくくり部分における述懐はとりわけ興味深い。そこで彼はひしひしと自らの精神的、身体的な老いを感じる状況のなかで、この先どこに連れて行かれるのか分からないと洩らす一方で、読者には自分の書き物を通じて、自分がどこから、どんなふうに着るようになるのかを知ってほしいと述べている (cf.817)。「これから何が起きるか見当がつかない」、「自分がどんなふうにして死んでいくのかも予想できない」というモンテーニュの実感は、老年期に入った者が等しく共有するものだろう。知覚器官や身体的・精神的機能の衰亡による不調を暗澹とした思いで見つめない人はいない。モンテーニュは、身体的に老いていく人に特有の傾向として、退屈なおしゃべり、とげとげしい態度、人づき合いの悪さ、過剰なまでの物惜しみ、ねたみや意地悪さなどをあげている (cf.817)④。「老いは、顔よりも、精神に、多くの皺をつけるのである」(817)。老いを重ねると、顔の皺は増え、しみも目立つようになるが、それ以上に、精神が皺くしゃになって活動不全になりやすいという診断である。

モンテーニュによれば、老いは気づかれないままに進行する「強力な病 *une puissante maladie*」(817)であり、ひとたびこの病に罹ると、心身融合存在としての人間の、とりわけ精神がやられてしまう。それゆえに、精神の老化を少しでも遅らせるためには、老化のプロセスを遅らせる努力や、老いに対する用心深さが欠かせない (cf.817)。さらにまた、精神の働き方に老いの影ができるだけ差し込まないように注意することが大切なのだ⑤。そのことはまた、精神と睦みあう関係にある身体に配慮することにも結びつく。このようにして心身両面に配慮し続けたモンテーニュだからこそ、その生活描写は生彩に富むものとなっている⑥。

晩年のモンテーニュは、老いという強い病による心身の衰弱を避けたいものと思いつながら、それにできるだけ抵抗して、生を愛し、享受して生きることが望ましいと読者に示そうとしている。第三巻の一章「経験について」には、老いてなお、それまで貫いてきた生への積極的な態度を維持し、豊かに生きようとするモンテーニュの覚悟が語られている。「生きることの持ち分がより短くなれば、それにつれて、それより深く、充実したものにすべきだ」(1112)。彼は、自然という偉大な全能者からの贈り物としての生に感謝し、その生を愛して存分に生きることを大切に考えている (cf.1113)。その具体的な手立てとして、彼は、精神には身体の活性化の役割を期待し、身体には精神への抑制の働きを求めている (cf.1114)。先述したように、モンテーニュにとって、精神と身体は相互に睦みあい、相互により充足したあり方を求めていく可変的な資質を備えている。精神が弛緩すれば、身体も生き生きした活動のリズムを失い、逆に身体がだらけてしまえば、それにつられて精神も怠惰な状態に陥ることは、われわれの日常経験においても自明である。心身は、常に相互に影響を及ぼしているものであり、そのありさまに注意して、両者の調和的な働きを実現するのがモンテーニュの姿勢である。

こうした姿勢の背後には、年老いてもなお精神的、身体的な快楽を享受し、生きることを楽しむべきだというモンテーニュの高らかな人生讃歌があると言えよう。「われわれの偉大で、輝かしい傑作は、自分にふさわしく (a propos) 生きることである」(1108)。「自分にふさわしい生き方」とは、自分の生が自然からの贈り物であることを忘れず、授けられた生に感謝し、その全体を自分なりの仕方、全力で味わいつくすことであろう。それは、与えられた一日一日を集中して楽しむことでもある。モンテーニュは、『エッセー』のおしまいの方でこう述べる。「自分の存在を正しく享受できるのは、神的なまでの、絶対的完成なのだ」(1124)。自分のありふれた日常を愛し、自己に徹して精一杯生きることこそが大切なのだ。

晩年のモンテーニュは、読者に向かって、「私は生きることとを愛し、まると楽しんできたが、その姿勢は老いても変らない。老化に伴って心身がたが来ても、私はなお生を愛することを止めない」という、自然からの贈り物としての生に対する愛の讃歌を口にしてしている。彼にとって、老化は紛れもなく衰弱の過程として受けとめられていたが、他方で、生の十全な享受の機会をもたらずものとして積極的に受け入れられていた。老年の日々に祝杯を―それがモンテーニュの生のスタイルであった。彼においては、老衰と老熟(老成)、あるいは円熟が共存したのである。毫碌、老残、老醜、社会のお荷物といった老人にまつわるネガティブな像を打ち砕くモンテーニュの老人観は清冽である。

## 2 ジャンケレヴィッチの老人観

### ―老化と生成という出来事

ジャンケレヴィッチは、徳に関する問題と並んで、「死」についてとり

わけ強い関心を示した哲学者の一人であるが、死の手前の老年期についても思索を重ねた。彼は、ダニエル・デインとの対談のなかで、「老いとは何か」という問いに対して、老いは「実存の根源的なパトスである生成の不可逆性」<sup>⑦</sup>であると答える。彼の哲学のキーワードである生の生成は、一回限りの、やり直しのきかないプロセスを意味する。そのことを踏まえて、彼は、老年期には悔恨と、最も感動的で、心をえぐるような詩とが生まれるとも述べている。<sup>⑧</sup>「もう二度と元に戻れない」という思いは、「こうしておけばよかった」という後悔の念と容易に結びつく。また、「もう先がない」という切迫感は、現在を精一杯生きるしかないという覚悟につながり、そこから「生の須臾性」を深く受けとめて、つかの間の生を生きる喜びや悲しみの感情を鮮烈に詠う詩が生まれることもありうるということだ。こうした悔恨の意識や、生の有限性の意識は、ジャンケレヴィッチの言い方を借りれば、自分の人生の内側にいながらも、その外側に立って自己の生の生成を見渡すことのできる人間にのみ訪れる。<sup>⑨</sup>青春のただなかを無我夢中で生きている時には、その内側で情念の噴出する出来事に翻弄されて右往左往することが多いが、老年期に入ると、自分の生から脱け出して、その全体を外側から展望できるようになるのだ。生の内と外の往還、生の二重性の意識を保ちながら生きる経験、それが老年の日々を形づくることになる。

ジャンケレヴィッチの老人観は、大著『死』<sup>⑩</sup>の第四章「老化」に詳述されている。モンテーニュと共通するのは、老化を心身の衰退 (declin) と見る視点である。しかし、衰退に関するジャンケレヴィッチの記述は、モンテーニュのそれと比較すれば、はるかに執拗であり、具体的に細かい。例えば、老化に伴うのは、新鮮さの枯渇、躍動性や情熱的な信念の鈍化、純潔さの摩滅 (Usure) などの心的な症状である。<sup>⑪</sup>身体に関しては、身体組織や血管の硬化、骨の漸進的な脆弱化、心臓の疲労、老眼な

どが無気力の前駆症状として示され、老いた身体は、自分の重みで大地の奥深くに傾くかのようになり、曲がってくるとされる。<sup>12)</sup> 背中の曲がった老人は、大地を踏みしめて歩く力を失い、大地の表面をこするようになり、歩くようになり、やがて地に伏すことになる。ジャンケレヴィッチが自分の身体の外部に出て自分の老いを観察する姿勢と、自分が目にする老人たちの観察を通して行う一連の言い回しは、われわれが日頃身にしみて感ずることや、周囲の老人たちの振る舞いを見て気づくこと、見逃していることなどを克明に記述している。それは、「老化」が抗いがたく衰亡へ、死へと傾いていく現実であることを如実に物語っている。

モンテーニュには、すでに述べたように、老いに抵抗して生きようとする実践的姿勢が顕著だが、ジャンケレヴィッチには、老化という現実をただひたすら凝視する傾向が強い。「老化は、実際に、死によって不可避免的に限界づけられた生成が、長い年月の間にこちら側でとる形である」<sup>13)</sup>。死の手前で起こる生成についてはこう語られる。「生の生成は、存在への連続的な到来 (avènement) であり、そのまま (それに付け加えてではなく、そのまま) 非一存在への連続的な歩みなのだ」<sup>14)</sup>。注目すべきは、「到来」という言葉である。「到来」とは、主体が意図的に操作できない出来事が主体にやってくるということである。主体は、この出来事によって不断に変容をこうむる受動的な存在でしかない。ジャンケレヴィッチは、別の著作で、「到来する」というのは、到来し、不意に生じることがゆえに無ではない何か、したがって、存在と非一存在の間にあるような何かについて語ることだと述べている。<sup>15)</sup>

生の生成は、何かが不意にやってくる過程として把握されている。しかし、不意に到来するものの多くは、到来するや否や去ってしまう。それが去った瞬間には、次の何かが到来しており、それも直ちに過ぎ去るので、結局のところ、到来するものが何であるかは永遠に知りえないの

である。刻々と移行する生の生成の諸瞬間を対象化して名指すことはできない。ジャンケレヴィッチが何度も言及する、「ほとんど無 (Presque rien)」、「なんだか分からないもの (Je-ne-sais-quoi)」は、生の瞬間における経験不能なものを指し示している。われわれの生においては、決して対象化できないような瞬間の出来事が絶え間なく生起しているのである。ジャンケレヴィッチが語る生成は、こうした経験的に確認できないものの横溢する「豊穡」なプロセスにはかならない。

しかし、ジャンケレヴィッチは、生の生成が諸瞬間のみからなると考えるわけではない。「生成は人間にとって、ただ一つの存在の仕方ではあるが、生成を形作るためには、継続 (Kontinuation) と瞬間的な切れ目 (Fracture) がなければならぬ。したがって、被造物としての存在 (Esse) を構成するのは瞬間と合間 (intervalle) の混合なのである」<sup>16)</sup>。「生成そのものは、気づかれることのない無数の断層によってのみ生成するのであり、これらの断層が持続の継続性を構成させるのである」<sup>17)</sup>。だが、ジャンケレヴィッチは両者を「混合」とみならずだけでは不十分であり、瞬間は、一方では、合間があってはじめて瞬間たりうるし、他方では、合間を有機的に持続させるために欠かせない役割を果たすと言う。<sup>18)</sup>「瞬間は、持続のあらゆる経過が椎骨を持つようにする」<sup>19)</sup>とも述べている。この比喻は分かりにくいだが、合間がなければ瞬間が入りこむ余地がないし、合間に入りこんだ瞬間は、そのつど合間に有機的な連関をもたらすということであろう。有機的な連関とは、異質なものが相互に浸透し合う事態を指す。とはいえ、われわれは、ジャンケレヴィッチが強調する生の生成の持続性、有機的連関性と、それに対立する瞬間性とが浸透する場面を目にすることはできない。瞬間は「持続の無」であり、対象とはならないからである。

とすれば、この場面をどのように理解すべきなのか。われわれの生は、

一般的には、細切れに分断され、前後の脈絡を欠いた支離滅裂なものは決してないので、それが持続的なプロセスであると暗黙の内に信じているのであるが、そこには、たとえば瞬きの現出が即座に消失であるような瞬間的な断層が生じていることも否定できない。この断層は、先に述べたように、対象化不能な、「ほとんど無」、「なんだか分からないもの」であり、「超経験的なもの」であるが、まったくの無でないことは明らかである。ジャンケレヴィッチによれば、こうした瞬間的に現出し、消失する断層と、生の持続の相互浸透こそが生生成の相貌にはかならない。それは、両者があい交えて「主体的に」生成を繰り広げる能動的な位相であり、われわれの生はそれを受容する受動的な位相、「到来」を感受する出来事として生起している。生成は、持続の合間に現われた瞬間が、そのつどの現出を通じて自ら「つくる」位相と、その位相が生成の持続のなかへ溶けこむや否や、持続のリズム従っておのずと「つくりれていく」という位相から成るのである。<sup>20)</sup>

われわれの生涯は、こうした能動的な位相と受動的な位相が相互に交错しつつ経過する生成に支えられている。われわれは、この生成のリズムを意のままにすることはできない。生成は、われわれが受容するほかないものであるがゆえに、この章の冒頭で引用したように、まさに「実存の根源的なパトス」なのである。生の生成は、モンテーニュにとって、自然からの贈り物であり、感謝して全身で享受すべきプロセスであったが、ジャンケレヴィッチにとつては、「パトス」という一語に示されるように、実存（人間）が身に蒙るプロセス、苦しんで受容するプロセスであった。先に述べた、われわれの意のままにならない仕方では出現する「存在への連続的な到来」と同様に、生の生成も受苦の出来事として受けとめるしかないものである。

### 3 実存と生成

『死』の第四章「老化」では、これまで述べてきたように、生の生成が主題化されている。しかし、言うまでもなく、生の生成はそれ自身が自己完結的な統一体ではなく、「われわれ」、「人間」、「自分」、「実存」の生成である。すなわち、生の生成とは、実存の生を支えるプロセスに他ならない。とすれば、ジャンケレヴィッチが生生成と人間的な実存とのかかわりをどのように把握しているのかをもう一度検討してみなければならぬ。2の冒頭で述べたように、彼にとつて、「人間はただ単に存在するものではなく、自分が存在していることを意識するのである」<sup>21)</sup>。モンテーニュは、存在している自己の不断の移行性にとりわけ意識的であった。ジャンケレヴィッチは、われわれが自己の存在を意識する存在であることを強調する。自己は生成のプロセスと不可分な存在であるがゆえに、意識されるのは自己の生成であり、両者の自己関係性のあり方は類似している。

第四章における老化を意識する実存のありようは、「われわれ」、「私」、「人」、「自分」などを主語とする文章に表現されている。いくつか引用してみよう。「生物学的な若返りの秘密が発見されたとしても、私はなおも老化するだろう」<sup>22)</sup>。「人は、もしも自分自身の生成を鳥瞰せずにその中にとどまっていたならば、のんきに完全な充実さのなかで生きることだろう」<sup>23)</sup>。しかし、それは不可能である。われわれは、自分の生涯を見渡してみよう。時間を生きる存在だからである。さらにまた、「人は衰退し、同時に自分自身の衰退に立ち会う」<sup>24)</sup>。人間以外の動物や植物と違って、人はおのれの崩れゆくさまに直面して愕然とする存在なのである。「老いていく人は、ある日、残酷な現実にはつととする。ある日、それまでほんやりと見ていた自分の顔のしわに気づき、その前兆を思案げにしげ

しげと見つめるのだ」<sup>25</sup>。こうした引用文中の主語は、いずれも自己の生成、もしくは衰退を意識する存在である。人は、生の生成に支えられつつ、その最中に在って、現在を生きるだけでなく、現在と重なり合う過去の現象を想起し、未来を先取りしながら生きている。しかし、人は生の最中に在るだけでなく、その外に出て、生成するにつれて徐々に衰退する自己を鳥瞰的に意識する存在でもある。注の9とも結びつくが、ジャンケレヴィッチが強調するのは、生成の内部にいて、同時にその外部にいる人の二重性である。「人は内にいると同時に外に在るのだ」(「On est à la fois dedans et dehors」)<sup>26</sup>。人は生成の内側で自らの老いを受けとめ、その外側に立って、老いが終わりに近づいていることをしみじみと知る。ジャンケレヴィッチは、この場面では哲学的に対象化されて論じられる自我一般ではなく、いまこの瞬間を生きる実存としての「私自身」が問題となるがゆえに、後者を抽象的なモノド論や、非主体的な人格主義に連れ戻すことはできないと考える。自我を対象化して語るのではなく、いまこの私自身が事態をどう把握しているのかという、自我の実存的な自己把握が問題なのである。

こうした文脈において実存が主題化される場合の鍵概念は、「感得、会得または体得 (réalisation)」<sup>27</sup>である。感得とは、自分が老いていく現実を真面目に受けとめること (prise-au-sérieux)<sup>28</sup>であり、老いていざれ死んでいく己の運命を身をもって知ることである。誰もが知識や観念として知っていることを、他人事ではなく、まさに自分の事として受けとめることである。「老いていく人は、予兆と自分自身の死との結びつきを感得して捉えなければ、共通の場所と敬虔な平凡さという非主体的な領野を離れることはないだろう」<sup>29</sup>。要するに、人は老いる、人は死ぬというように自明のこととして誰にも共有される一般的な知識をいったん脇に置いて、老いや死をまさにこの私が関与する現実の出来事として主体的に

受けとめることである。この態度は、生以上に死を学ばなければならぬとしたセネカを思い起こさせる<sup>30</sup>。しかし、セネカは「死を学ぶこと」を強調したが、ジャンケレヴィッチにとって死はすでに暗黙の内に知られていることであり、新しく学ぶことではない。ジャンケレヴィッチにとって重要なことは、老いていく自己の現存と、近未来の自己の不在に直面して、終わりを深く感得することである。「年老いていく人は、自分が知らないことを習うのではなく、新たな次元の中で、新たな照明に照らされて、悲しい真理を発見するのだ」<sup>31</sup>。セネカの内省的な思索に親んでいたモンテーニュは、自分の外側を見て生きている世間の人々に抗して、自分の内部を観ることに専念したが (c.157)、ジャンケレヴィッチは、老いる人間が身近に迫る死に接して感得する状況に関心を寄せたのである。

ジャンケレヴィッチが強調している感得する存在は、老年期を迎える誰もが経験することを、誰もが経験しなかったことをはじめて経験するかのようにして生きる実存である。彼は、後年、「アンリ・ベルクソンへの厳かな敬意」の中で、ベルクソンが哲学を通じてわれわれに感じ取らせたのは次の事だと述べた。「哲学とは、あたかも自分だけがこの世界にいるかのように、あたかも自分が最初にそれをするかのようにして、あたかも誰一人として自分の前にそれをする人がいなかったかのようにして、それぞれが自分の責任で実行する行為である」<sup>32</sup>。ジャンケレヴィッチは、この意味での哲学的な行為は次のような意味での愛に似ているという。すなわち、哲学する者は、これまで無数の人々が経験してきた愛の行為を、それがあたたかも新しく、未曾有なこと、前代未聞のこと、初々しいことであるかのように感じて行うのである<sup>33</sup>。この見方には、『死』における老年論がごだましている。この書物においてジャンケレヴィッチは、老人は自らの老いをまったく初めての、未曾有な出来事として新鮮

に受け止めて、自分のみ固有な経験として生きぬくということの大切さを強調している。それは、おのれの老いる経験を味わいつくすということでもある。この態度は、モンテーニュの「自己の全体をまるごと享受する」という姿勢を思わせる。モンテーニュの場合、この態度は、先述したように、贈り物としての自己の存在に感謝することから生まれた。ジャンケレヴィッチの場合は、これまで誰も経験しなかった仕方であら一度限りの老いを経験しようとする覚悟が、老いの経験の享受へと結びついている。

ジャンケレヴィッチは、『死』の第三章のおしまいに、「人生は、最初の音から最後の音まで暗誦しているソナタのように、レコードに記録されているのではない。自分自身の生涯とは、各人がそれぞれ常に初めて読む本なのだ」という一文を残した。すぐれた古典を初めて紐解く人は、自分に固有な初めての経験を獲得する。多くの人に読みつがれてきた本であつても、それを手に取る人には常に新しい本であり、その本とともに未知の世界が開けてくる。われわれの生涯も「常に初めて読む本」のように、新たな世界との遭遇の連続である。何が起こるか分からない、自分がどうなるのかも分からない出来事の連続でもある。それゆえに、ジャンケレヴィッチは、われわれの生涯は「ひとつの冒険 *une aventure*」<sup>38</sup>ではないだろうかと自問する。

われわれが老いて、崩れていく、後戻りのきかない過程も、ジャンケレヴィッチの言うように、一日ごとの、あるいは瞬間、瞬間の新たな出来事の連続である。それは、予想もしていなかった心身の異変やそれに伴う葛藤、不安といった危機的な状況に遭遇することである。しかし、その状況の中で、老いの経験を初めて、しかも一度かぎりのものとして積極的に受けとめて生きようとする覚悟を持てるならば、老年を生きることとは一種の冒険になると言つてよいだろう。先に述べたように、先

行きの不安を見据えながら、老いの日々立ち向かうとしていたモンテーニュも、老いの困難を生き抜くひとつの冒険を生きた一人であった。両者は、老いる経験の意味を模索し、自らの老いと積極的に関わることをやめなかったのである。

#### おわりに

以上、モンテーニュとジャンケレヴィッチが老いるという経験をどのように捉え、どのような態度で老いの経験を生きようとしたかを考察してきた。モンテーニュは、一方では、老化が衰退という自然の過程と結びつくことは避けられないとしても、他方で、自然は心身融合体としての人間の支柱であり、自然の恩寵に感謝して自己の存在を味わいつくすことこそが最大の喜びであると考えた。ジャンケレヴィッチも、われわれが生みの生成に支えられて存在することを強調し、その生成の一面面である老化の過程の一回性を感得しつつ、存分に生きることの喜びを力説した。両者は、「老いてなおよく生きる」という生存の喜びを訴えたのである。ジャンケレヴィッチは、『第一哲学』のおしまいでこう述べた。「われわれは哲学なしに、音楽なしに、喜びなしに、愛なしに生きることができないように、結局、なんだか分からないものなしに生きることができ。しかし、それはよく生きることではないだろう」<sup>39</sup>。

忘れてならないのは、彼らが読者や学生、聴講者に向けて書いたということである。モンテーニュは、自分の考え方や、時にぶざまな滑稽なふるまいの描写も含めて、自分の生き方を読者に率直に、時にはユーモアを交えて書き残した。そのリラククスした文体からすると、モンテーニュは、それを読んで、できれば読者に楽しんでほしいという希望を持っていたと思われる。哲学は陽気で、元気いっぱい、愉快なものであつ

て、怖い顔つきの、なんだか近寄りがたいものとは対極に位置するものだと見なしていたモンテーニュであったから (CLTIS-177)、老いの経験の語りには深刻さはなく、老人の生感の一端を知る格好の読み物となっている。

ジャンケレヴィッチは、ソルボンヌの教室であらゆる職業や年齢の人に向かって長年講義を続けた。聴講者の一人、ジャン・ジャック・リュブリナによれば、ジャンケレヴィッチは、哲学を教えることよりも、聴講者に自分で考えることを求めたという<sup>③</sup>。教室での彼の役割は、聴講者の心を刺激し、火をつけて、自分の投げかける問題を聴講者一人一人が自分で再考するように導くことであった<sup>④</sup>。ジャンケレヴィッチが『死』の中で記述する老いの経験も、教室で語られたものである。それを読むわれわれには、彼が聴講者に求めていたのと同じ態度が要求されている。

#### 注

① そうした特徴を持つ本を三冊だけあげる。杉田玄白が八四歳の時に書いた「耄耋独語―老いぼれの独りごと」は、食事や排泄面でのみじめな現実をことごとまかに記述して、極めて面白い読み物である。そのざつとばらんな描きぶりはモンテーニュを思わせる。(『蘭学事始ほか』芳賀徹他訳、中公クラシックス、二〇〇四年、三二五～三四〇頁参照)。黒井千次は『老いのゆくえ』(中公新書、二〇一九年)の中で、老いの日々の困惑やトラブルなどを、冷静に、時にユーモラスに描いている。ジャンケレヴィッチがしばしば引用するバルタサル・グラシアンは、『人生の旅人たち エル・クリティコン』(東谷頼人訳、白水社、二〇一六年)の第三部「老年期の冬」の第一考「△老境さま△の荣誉と恐怖」のなかで、老人を揶揄したり、こき下ろしたりしている。

② *Les Essais de Michel de Montaigne*, Édition conforme au texte de l'exemplaire de Bordeaux, préparée par Pierre Villey, Tome Premier, Tome Second, Press Universitaire de France, 1978, p.1106. 以下、本書か

らの引用や参照は、本文中にアラビア数字で挿入する。

③ 『エッセー』第三巻第五章「ウエルギリウスの詩句について」は、恋愛や性愛、肉体的な快楽をほめたたえる魅力的な文章がいたるところで現われる傑作である。モンテーニュはこの章で、さまざまな文化圏における性に対する態度についても興味深い考察をおこなっている。ピーター・パークも、『モンテーニュ』(小笠原弘親、宇羽野明子訳、晃洋書房、二〇〇一年)の「心理学者としてのモンテーニュ」のなかで、この問題を扱っている。

④ モンテーニュ的な老人観は古今東西に共通して見られる。たとえば、アリストテレスは、老人の特徴として、卑屈、心の狭さ、生への執着の強さ、自己中心性、損得勘定、愚痴、ユーモアの欠如などをあげている(戸塚七郎訳『弁論術』、岩波文庫、一九九二年、二二八～二三〇頁参照)。仙厓和尚(一七五〇～一八三七)による「老人六歌仙」では、くどくなる、短気になる、愚痴る、ひがむ、欲深くなるなどといった言い回しで老人が皮肉られている(佐藤一斎著、川上正光全訳注『言志四録(四)言志巻録』講談社学術文庫、一九八一年、二七五～二七六頁参照)。

⑤ これに関連して、保莉瑞穂は卓見を述べている。「彼は人生のあらたな試練と経験に出会うたびに、思索し判断する力を試しつづけ、そうすることでその力を鍛えることに努めたのである。彼にあつて真に見事なのは壮年の理性を鍛えつづけて、それが老齢によって変質せずに保たれていることである。」(『モンテーニュの書斎』『エッセー』を読む、講談社、二〇一七年、三一九頁)。

⑥ マイケル・A・スクリーチは、身体と心が幸せに結婚した夫婦と見なし、いたモンテーニュの身体を重んじる態度について、傑出した論考で論じている。(『モンテーニュとメランコリー』荒木昭太郎訳、みすず書房、一九九六年、第一六章「からだ」参照)。

⑦ *Vladimir Jankélévitch, Penser la mort ?*, Éditions Liana Levi, 1994, p.21.

- ⑧ Cf. *ibid.*, p.21.
- ⑨ Cf. *ibid.*, pp.23 – 24.
- ⑩ Vladimir Jankélévitch, *La mort*, Champs, 2017.
- ⑪ Cf. *ibid.*, p.285.
- ⑫ Cf. *ibid.*, p.294.
- ⑬ Cf. *ibid.*, p.280.
- ⑭ Cf. *ibid.*, p.280.
- ⑮ Cf. Vladimir Jankélévitch, *Premières et dernières pages*, Éditions du Seuil, 1994, p. 215.
- ⑯ *Ibid.*, p.218.
- ⑰ *Ibid.*, p.219.
- ⑱ Cf. *ibid.*, p.220.
- ⑲ *Ibid.*, p.220.
- ⑳ *Ibid.*, p.220.
- ㉑ Vladimir Jankélévitch, *Penser la mort ?*, p.23.
- ㉒ Vladimir Jankélévitch, *La mort*, p.285.
- ㉓ *Ibid.*, p.316.
- ㉔ *Ibid.*, p.317.
- ㉕ *Ibid.*, p.322.
- ㉖ *Ibid.*, p.317.
- ㉗ *Ibid.*, p.324.
- ㉘ *Ibid.*, pp.321 – 325.
- ㉙ *Ibid.*, pp.321 – 322.
- ㉚ *Ibid.*, pp.323 – 324.
- ㉛ セネカ、茂手木元藏訳『人生の短さについて 他二編』、岩波文庫、一九八〇年、一二二頁参照。
- ㉜ Vladimir Jankélévitch, *La mort*, p.323.
- ㉝ Vladimir Jankélévitch, *Premières et dernières pages*, p.92.
- ㉞ Cf. *ibid.*, p.92.
- ㉟ Vladimir Jankélévitch, *La mort*, p.279.
- ㊱ *Ibid.*, p.279.
- ㊲ Jean – Jacques Lubrina, *Vladimir Jankélévitch Les dernières traces du maître*, Éditions du Félin, 2009, p.36. 別の受講者の原章二によれば「ジャンケレヴィッチは、自分を物書きではなく、教師として自認していたと云う。『人は草である。『類似』と『ずれ』をめぐる考察』、彩流社、二〇一三年、二一八頁参照)。
- ㊳ Jean – Jacques Lubrina, *op.cit.*, p.37.

(阪南大学名誉教授)